

印度旅行の思出

高　　畠　　寛　　我

印度の旅の思ひ出をそこはかもなく書きつけて見る。

昭和三年十二月の初め私は孟買へ着いた、街頭では百度程の暑さで、旅館では煽風機が廻轉して居る、佛蘭西でT教授から紹介して貰つたこの地のS氏を先づ訪ねた、S氏は既に私がコロンボへ着いたとき、コロンボから陸路、孟買までの旅行コースや印度内地旅行のコース、カルカッタから日本へ歸る連絡船の出發期日などを取調べて通知して下さつて居たので、大變便宜を得たのである、同氏は勤務先の會社に訪れた時、快く迎へられ、早速自分の宅に來いこのこゝで、兩三日御厄介になるこゝにした、同氏は實業家であるが、印度古代文化の研究にも興味をもたれ、書物や書店の事に付色々御話を聞いた、印度人のボーイを一人つけて下さつて小用を云け付けよこの事であつた、そして印度人は首を横にふればイエスで、初めは分らないからこの注意があつた、實際上、心得て置くべき事だと思ふた。

私は日程の關係で孟買近郊の觀光をやめ、一日プーナ大學の見學をやり、大體の市内見物を済ませ、直に旅行出發を思ひ立つた、S氏は私の一人旅に付ても同意せられ、旅行のコースや、用具に關し、親切な指示を與へられ、就中、旅のふりだしであるアジャンタ洞窟行に就ては停車場へ會社の自動車をして廻してやるこの重ねぐの御厚意は全く感謝した次第であつた。

孟買を夜の七時に立ち、翌朝の六時半、ジャルガオン驛に着く、豫てのS氏の厚意にて、朝まだきに、會社の出張所から廻された自動車で印度人諸氏の出迎を受く、かくて少憩の後、印度人二氏の同乗を得て、一路アジャンタへ向ふ、行程三十七哩、約三時間半にて十一時頃アジャンタ洞窟の直前に乗りつく、若し驟雨の後でもありしならば、前を遮る小川の氾濫により到底間際までは行けざりしこの事であつた、加之、普通は驛よりトンガといふ車で八時間乃至十時間を要し、一泊を餘儀なくせらるゝので、勿論、驛には自動車などはないので、S氏の厚意は一人旅の私には餘程感謝せなければならぬのである。

アジャンタ洞窟は名にし負ふ壁畫にて知られて居るのであるが、その洞窟が彎曲せる溪谷に沿うて立ち列び、林樹泉流の間より望見する遠景の美觀は云ひ知れぬ情趣を覺えたのであつた、二時間餘りの短時間にて窟内を見學して再び車中の人となる。

有名なサーンチの佛塔はサーンチ驛から山上に仰ぎ見らるゝ程の近さにある、しかしこの驛は急行列車は普通では停車しないので、下車を欲せば、前の驛にて通知し置けば停めて呉れるのである、これは列車時間表にも其事が書いてあるので初めての者には珍しく感ぜらるゝ、私もその通り行ふたので驛前で停車した、が、この驛は小さいのでプラットがない、しかも車の入口の臺が日本のよりも高く、止むを得ず荷物を先へ抛り出して、後から飛び降りたやうに思ふ、降車客は私一人で、かゝる時には一人旅の心細さをつくづく味ふ。

サーンチよりアグラを経てデリーに向ふ、アグラにタジマハールの廟を訪ね、デリーに舊城を見、イスラム文化の華麗に驚く、或はハスチナブラの故趾をデリーの郊外に偲び、阿育の鐵柱を見て大王の聖業を仰ぐ、かくてラホール行を

斷念して佛蹟巡拜の爲に南下の列車に投ず。

ラクノーへの道すがら、汽車は沿道の相當なる驛につく、停車して暫時、發車の時刻を待つに、突然半鐘の音が聞ゆる、恰も日本で勤行の開白を報する時のやうな鐘の打ち方、始め緩にして、次第に急になり行く、私はハテナと思ひて親しみを感じて耳を傾ける、その時向ひ側に停り居た列車が徐かに動き出した、今の音は發車の爲の合圖であつた、あの鐘の打ち方が印度起源であるこゝを實際的に知つたのである。

祇園精舎の故地に詣づる時、田舎道をエツカ（二輪馬車）に乗りて靜かなる村を經つゝ、山路にかゝる、野生の猿があちこちに飛び交ひて、人を臆せぬ和やかなる振舞を見ては、何もなく人間と動物との間に隔てなき親しみを感じた、やがて彼方より巨大なる黒き何物かゝ蠢めきつゝ近づくを見れば數人の土人が象に乗りて徐々々來るのであつた、私はいよく動物への融合の感を深めて、印度に本生譚の起りし事の理りなる事を考へさせられたのである。

カシア驛に下車して馬車にてクシナガラの故趾といふに向ふ、涅槃堂に、金箔の大涅槃像を周匝伏拜し、寂しく世尊入滅の跡を懷ひ、苦力の案内に任せて、世尊荼毘の地なりと傳ふる小丘に詣づ、かくて時迫りしが故に直に引き返してベナレス行の列車に乗る。

サルナート（鹿野苑）にダメク塔を拜し、ブダガヤに大塔と菩提樹道場を巡禮する。この二大靈蹟は、人の多く熟知する所、而も交通便利の地に位し、何人も參詣するに容易き處なれば、今茲に蛇足を加へるこゝを控へる

ここにする。

ブダガヤより王舎城に向ふ、王舎城はバクチャプール驛より輕便鐵道にて終點ラージギルに下車する地點にある、而してラージギルへは一日一往復しかない、私は夕方にバクチャプールに着く、王舎城行は翌朝の七時頃發車であつたと思ふ、この驛の附近でのバンガローの有無が分らなかつたので驛の待合室に泊ることにする、驛で宿泊することは印度では何等不思議ではない、印度内地を旅行するにき、汽車の都合で時々夜半に乗換せねばならぬ事がある、かゝるにき田舎の驛などで、待合室で椅子に凭れ、又は地上にゴロ／＼寝たり、或は蚊帳を覆うて横はるものもある、私はこの時まで、屢々時間の待合せに休んだ事はあつたが、完全に一夜を待合室で過すことはこの時が初めてであつた、蚊帳を携帶して居なかつた私は蚊軍を案じたが幸に蚊はあまり居なかつたが、困つたことは小驛で食堂がない、どこかに何かの賣店がないか、外へ出て見たが土人の家の散在するのみで何物も見當らず、引返して室に入つて悄然として椅子に凭る、十時頃迄は二、三人の出入があつたが、それから私一人で、容易に眠られず、夜の明くるを待兼ねるうち、暫らくはう／＼したやうであつた、夜が明けてブラットへ出て見るに、そこでは數人の地上に土人が横つて一夜を過したらしいのを見受け、幾分慰めらるゝを覺えた。

ラージギルに着いたとき土人の苦力に案内されてバンガローに行き、そこで直ちに食事を頼んで前夜來の空腹を漸くにして癒する、時は既に晝頃であつた、この地では靈鷲山詣でをのみ目的として來たのである、暫らく休息して先に案内を約束した苦力の來るのを待つた、さうした事が彼は來ない、時間の都合もあるのでバンガローの番人に催促する、漸くにして苦力は來たが、それは前のとは違つた苦力であつた、彼に伴はれて出發する。

バンガローを出で、先づ南方に進み平地を行く、この邊上茅宮城の跡であらう、溫泉場を傍に見て西方の山麓に行きつく、そこに小さい石室がある、苦力はこれを指して何か説明してくれたが要領を得なかつた、七葉窟としては餘りに狭い、坐禪入定の室でもあつたらうか、しかし苦力はわざ／＼こゝを見學する爲に道を迂回して呉れたのであつた、そこを去りて一路東へ進む、人家なく、山に圍まれた形勝なる平野である、次第に林中に入る、人影の認むるなく、四周寂しして聲なし、苦力は唯二人、密林の奥深く進み入りし頃、突然、後方に大きい人聲が聞えた、何事の起れるならん所柄、頗る驚かされた、やがて走り來る人の氣配あり、近づくを見れば別人ならず、これ先に約束せる初めの苦力であつた、私は漸く安堵せるも二人の苦力は口論を初めた、事の次第はそれと察せらるゝも、言語通ぜず、遂に二指を示して二人共に來れとの意を示した、事は難なく落着して、圖らずも二人の案内者に導かれながら心強く進み行くこゝが出来た、かくて林を離れて山道にかゝる、登り行きて山腹に出でし頃より磴道となる、進むに従ひて古煉瓦やうの破片の散在せるを見る、良久しくて磴道を過ぎ、暫時にして羊腸たる山路に入り岩石の下に至る、苦力は近道を行くらしく、雜草生ひ茂る山崖を攀づるに甚だ困難であつた、一人の苦力は脊に負はれよこいふ、云ふがまゝに負はるゝに他の苦力は身を支へくれ、よくも二人つれ來れると思ひながら漸くにして巖石の頂きに達す、苦力は目的の場所は茲なりこいふのであつた、峰自ら高臺をなし、見渡す所、五山に圍まれたる上茅宮城の故趾を一望の中に收め、廣潤なる蒼空は山麓の翠樹と相映じて畫の如く、幽邃閑雅にして寥々たる環境の中に森嚴身に迫るを覺える、遙かに前面に仰ぐ山はわれ、前日に禮せし伽耶大塔の地なりと苦力の指すに教へられて感慨愈々深きを加ふ、不徳宿縁に依りて妙典の説處を汚す、法の爲に努めずんば何に依つてか拜謝し奉るべきと慙愧默念久しかつたのであつた。問ふものあらん、これ果して眞の靈鷲山なりやと、思ふに鷲山の地の測定に就ては未だ必ずしも學説が確定して居ない、カンニグハム氏の説は今肯定せられず、私は與へられたる因縁に於て、たゞひ的確なる地域に相當して居なくともこの有縁の地に於ては的ら

すゝ雖遠からずであらうと思つた、無智なる苦力ではあるが附近に住するこの二人の印度人を信賴して満足するより外はなかつたのである、しかし少なくともこの地が西域記の

接^ニ北山之陽^ニ孤標特起^{……}又類^ニ高臺^ニ空翠相映濃淡分^レ色

といふに似て居たことは事實である。

ナールンダは王舍城より汽車にて三十分、バルガオン驛より一哩の地點にある、王舍城よりバクチャプールへの歸途にある、こゝには苦力が居ないといふので王舍城から先の苦力を連れてバルガオン降車場（驛といふよりも）へ下りた苦力に荷物を預け置いて獨りでナールンダに行く、ナールンダでは發掘の作業中であつた、大體の見學を済ましたが陳列館は館長が不在でしかで見られなかつた、私は歸路につくに當り初めて道の事が氣につく、來た道を歸れるかゞ不安であつた、今までは車ばかりであつたから道の事を考へる必要はなかつたのである、一人旅には心得べきことだと思ふた若し道に迷ふて豫定の汽車をミスしたなら、この茫々たる野原で野宿より外はなかつたのであつた、幸にしてもこの停車場につく、苦力は待つて居た、私は安堵の思をなして例の如く苦力に幾分の金を與へた、この時苦力は忽ち地上に平伏して私の足許に頭を接せんばかりに禮をして呉れた、五體投地といふのであらう、私は驚いて寧ろ、きまり悪く思うたのであつた。

カルカッタではやはりT教授の御紹介で、S商會のY氏に非常な御厄介になる、同氏の廣やかな御宅で一週間餘りも御世話になつた、カルカッタに着いたとき、同氏から同商會の青年實業家數氏がダージリンへ遠足を試み、虎丘へ徒歩で登らうといふ計畫あるを聞いた、虎丘からのヒマラヤ山觀望は世界的絶景の一とせられ觀光者の必ず訪れる處である

タイガーヒル

私は種々の意味でダージリンへ行きたいと思ふて居た折柄、早速参加の希望を述べたところ、幸に諾されたのであつた。

ダージリンは西藏に近き處であるので、何かほり出し物でも得られまいかこの好奇心から私は數日滞在の積りで先へダージリンへ行くことにした。

十二月の末の方であつた、私はカルカッタから夜汽車に乗じてダージリンへ向ふ、カルカッタは夏のやうに暑いのであるがダージリンではストーブを焚いて居るさういふので衣類を携帯する、夜半、そこで乗り換へたやうに思ふ、かくて一夜を車中に明し、翌朝眼覺めて車外を眺むるに既に汽車は山路にかゝり巒峰連つて嵐氣身に迫るのを覺えた、車は次第に山を登り、沿道の景勝愈奇なる、或は洞谷斷崖に沿ひ、或は密林鬱蒼たる間を行く、道盡くるが如くにして或は進む、蜿蜒として幾旋回、一處を往復するが如く、遅々として走る、飛瀑の聲、澗底の囁き、珍樹林をなして奇巖將に壁ちんちする、山愈高くして清嵐愈冷やかに、白雲脚下に漂うて、天界に登仙するが如く茫々たる下界を瞰下して進んで行くのであつた、かくて汽車は途中、クルセオン驛で食事の爲に二十分餘停車し、ダージリンへ着いたのは午後二時頃であつたさ覺ゆる。

かくて豫め通知して貰つて居た英國人の宿に落ち着き、町の見學をやつた、あちらこちらに古道具屋やうの店がありそこには西藏の繪畫や道具が多く、西藏經典なごも交つて見受けられた、梵語經典は偶々見付かる位のもので重に密敎系のものであつた、この古道具屋へは何回も足を運んだが、思はしきものはなく、二三の經典を記念として求めたのであつた。やがて虎丘登りの約束の日の前夜一行は着かれた。

翌朝午前三時、寒さを冒して服裝を整へて吾等は出發した、虎丘まで二里餘りさういふのである、山阪の麓まで來るさ馬が一頭用意してあつた、馬を勧められたが柄にないので辭退した、他の人が乗られていよく山道を登る、この乗馬の氏が虎丘へ着くまで、星の光りで暗がりの中を一方絶壁に沿うた危險な山路を悠々話しながら乗り通されたの

には感心したのであつた。

漸くにして虎丘へ廻り着いた、一行中の一人ミ私ミが殿がりであつた、一行の足並が早かつたのであつたか、私は随分苦しかつた、丘上へ着いた、一行は朝の食事はまだして居なかつた、寒さで慄へて居た私共は、宿の主婦が暖いコーヒを魔法瓶につめ、外にサンドウィッチを少々用意してくれたのを皆で少しづつ分けて口にしたミきには、全くいひ知れぬ暖かさミ旨さミを感じたのである。

かくて我等は時の移るのを待つたのである。

待つこゝ須臾にして、ほのくくミ明けゆく東の空、次第に明るみに浮び出づる巨大なる姿、黎明紅をそむるに連れてきら／＼ミ輝く中空の山巔、山又山、峰又峰、色彩は刻々に變化しつゝ秀麗なるヒマラヤの連峰は大鋸の如く巍然として眼前に展開したのである、その雄大なる偉容は大空に君臨する如く、その莊嚴なる威相は四周を淨化するが如く、見渡す限り蒼茫たる天空に屹立して白雪皚々、旭日に輝く麗容幽姿は誠に壯觀の極みであつた。

かくして朝陽が其全貌を現はしたミきには天空廣濶、靜かなるこゝ太古の如く、夜も心も一時に明け晴れたるを覺えたのである、山を下りて宿へ着いたミきは朝の八時頃であつた。

ダージリン行を了へて再びカルカッタに歸つた、それから二三日後であつた。

私の印度の旅で、短時日に比較的多くの勝地を見學巡拜するこゝが出来たこゝや、其他のあらゆる收穫は、前記のT教授、孟買のS氏、カッカッタのY氏の御厚意の賜に外ならない、此等の諸氏に深甚の謝意を表するこゝなくしては、こゝに擱筆するこゝは出来ないであります。